



ハ 今月の江戸しぐさ「**気の薬**」

江戸の人達は、さりげない思いやりの”相手にきずかせる助言”や”安心させる言葉”を「**気の薬**」と言っていました。

例えば旦那がお酒を飲みすぎている時に”あなた、飲み過ぎですよ”ではなく、”お体にさわりますよ、あなただけの体ではないんですから”という感じです。*さりげない、は粹のフィルターがかかっています。

これに対して怒りを惹起したり、不安になる言葉や、困ったりする原因を「**気の毒**」と言って、これを嫌いました。

また、日本人は、万葉の古代から言霊（ことだま）といって言葉の力を信じ、良い言葉は良い結果になり、悪い言葉は悪い結果になると考えていました。*現代では結婚式の忌み言葉などに残っています。

医療は不安になっている患者や家族と多く接する職場ですが、“さりげない”優しい言葉で人の心を救うことができる可能性があります。そしてそれは自分にも返ってくるものです。*嘘も方便ということもあります。

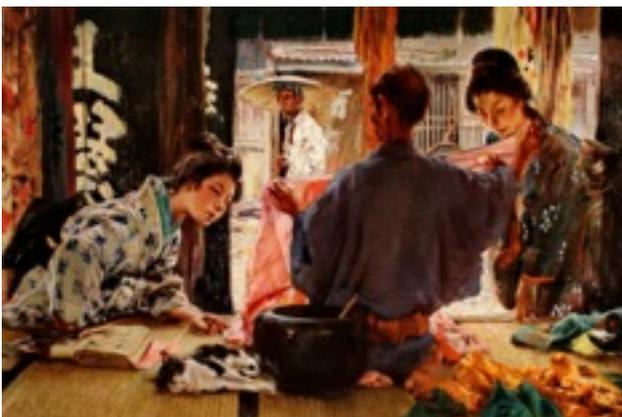
人を幸せな気持ちにさせることのできる人は自分も幸せになれます。乱暴な言葉を使ったり、不安にさせたり、批判的な言葉を使う人は実生活でそれが自分に返ってきていることをその人は知りません。

「**気の薬**」と「**言霊**」をおまじないにすると、良い事がどんどんおこるかもしれません。どうぞご活用を。

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。6歳までに習得すべき事とされていました。判断の基準は粹かどうかだったようです。

他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

しかし、当時の日本人は他の国と冷静に比較する余裕と知識がなかったため、それがどれだけ素晴らしいことなのか知りませんでした。



絹商人（部分）



ロバート フレデリック ブラム
Robert Frederick Blum
(1857~1903)

日本をこよなく愛したアメリカ人画家。
江戸の風情が強く残っていた明治中期に約2年半訪れ、当時の息づかいさえ感じる作品を残してくれました。